

随 想

日中大学比較あれこれ

赫 冀 成*

私は1980年3月から1986年7月にわたって名古屋大学の鞭研究室において留学生生活を送った。6年余り前、長期にわたった「文革」から脱け出したばかりの中国から来日した時、日本の社会についてはほとんど無知に近い状態であつた。にもかかわらず、日本と中国は「同文同種」の民族だと思つて、自信満々であつた。はつきりと憶えていることは、名古屋駅から出迎いのバスに乗つて大学へ行く途中、水流のように絶え間ない車の流れに驚きながら、よく目についた「麻雀」の看板には「日本人は焼鳥が大好きだ」と感嘆した。その後、大学の生活に溶け込むとともに、「奨学金はなぜ返すのか」「大学の授業で学生はなぜ教室の後の方から席を取つていくのか」と、素朴な疑問は日常茶飯事のように四方八方から出てきた。たまに学生に尋ねても、キリスト教のお説教を聞くように、その訳はまるで明らかにならなかつた。逆に、例えば、中国の場合、副教授が学長、講師が系主任を担当するのは別に不思議なことではないのであるがこれを日本の先生方に説明するためには、とても工夫を要した。日本と中国は歴史的に緊密な関係を持つている一衣帯水の隣国であるが差異はいたるところに深く存在すると切実に感じられた。考えてみると、それはそもそも異なつた文化、歴史および社会体制に起因して、人間の考え、風俗習慣ならびに教育体制に大きな食い違いを生じたためである。似て非なる表面的な経験は極めて誤解を導きやすい。この数年、日中間の文化学術交流は多くの面に広がつていつた。その交流を一層促進するためには真の相互理解が必要である。本稿ではこの目的を持つて、日中大学の体制、学生の気質などについてもつとも相異なる点について二、三の比較を試みることにする。

現在、中国の教育体系は日本と同じ六・三・三・四制である。言葉として紛らわしいことは、「中学は中学に非ず、高校は高校に非ず」。すなわち、初中は日本の中学、高中は日本の高校にあたり、高等学校とは文字どおり最高教育機関で、総合大学（教育大学を含む）と単科大学にあたる。その中で、もつとも、相異が大きいのは大学の体制である。第一には、単科大学が非常に多いことである。いわば、中国では「総合大学は存在せず、単科大学は大学と呼ばぬ（ほとんどは「学院」という）」という点で日本のイメージに合致しない。その経緯を説明するに

は、建国後の教育発展の歩みを回顧しなければならない。建国当初、ソ連形式が導入され、大学の全面調整がなされ、総合大学から工・医・農・薬などの学部が別れ、充実・統合してそれぞれの単科大学が造られた。その中でも工科大学はもつとも数が多く、特定の工業部門を狙つた設置がなされた。その結果、総合大学は文科系と理科系だけとなつた。要するに、現在の大学形態は当時行われた調整で体系づけられたものである。

日本では国立、公立と私立大学が並立しているが、中国ではすべて国立である。國務院の教育委員会（一昨年来まで教育部と言つた）は全国のエデュケーション事業を統轄すると同時に若干の大学を直接に管理している。他の多くの大学はそれぞれ國務院の各部・総公司・総局（日本政府の省にあたる）、ならびに省、市地方政府に管轄されている。なお、現在全国の千に近い大学の中、重点大学は百ぐらい認定されている。冶金関係では、東北工学院（沈陽）、北京鋼鉄学院（北京）が重点大学で、その外、昆明工学院、鞍山鋼鉄学院……など合計15か所の大学は冶金工業部に、中南工業大学などは有色金属総公司に所属している。本文は大学の実情を重点に置くが、研究部門の体制にも言及させていただく。同じように、各部（総公司・総局）とも規模の大きい研究院（所）、設計院を持つている。その下部機関である各省、市および産業部門もまた、おのおのの研究所、設計院を持つている。それらとは別に中国科学院は独立した系統となつており、そこでは百ぐらいの研究所が設置され、主に基礎科学の研究を担当している。いずれにせよ、こんな仕組から自主性の強い日本の大学に比べ多面にわたつて差異を生じる結果となる。

大学の中には、多数の系、系の下にはいくつかの教研室が存在する。教研室には定員がなく、だいたい10～20人ほどで、研究の必要に応じて小さいグループ（「課題組」という）に分けることもある。組織上では、日本の大学の学部、学科、研究室との対応させることは難しい。大学では学術職名制度に基づいて教授、副教授、講師、助教が授与される。ここで強調したいことは年齢層から言えば講師の幅はかなり大きいことである。また、学長、系主任、教研室主任などの役職は教育、研究、人事、財政などの管理職として学術職名制度とは別に存在しており、両者はかならずしも一致する訳ではない。

中国の学位制度は1981年から始まり、まだ完全に定着している訳ではない。そこでは、修士（「碩士」という）課程2年半～3年、博士課程3年となつている。募集にあつては卒業後二年以上勤務経験を持つているものが一定の比率を占めることとなつている。なお、修士・博士課程は大学のほか科学院、各部所属の研究院（所）にも存在する。ただし、学力水準を維持するため、一定の指導水準を有するものと認められ批准されたものに限られる。特に博士課程を持つている専攻はまだ数が少なく、

* 東北工学院

これからの普及が期待される。現在、32 重点大学において大学院（「研究生院」という）が設置されている。

学生の教育においては教えることがもつとも重視されるのは中国大学の伝統とも言える。専攻ごとに履修すべき科目、各科目ごとにその程度が決められ、教育委員会による「教育大綱」（指導要領）に基づいて、全国統一教材が作られている。さらに、各科目について時間数の大枠も決められており、それに従って授業が行われている。学生による評価が重視されており、教官は系統的に授業内容を分かりやすく教授するため、「教学法」をつねに検討することとなる。中堅教師は講義することに活躍し教授は研究指導に多くの力を注いでおり、この点も日本の大学と違う点である。

ここ数年大学の改革は全面的に押し進められつつあり、大学の様相は多面にわたって変貌している。従来、工科系と理科系、理工科系と文科系が画然と分離され、専攻が細分化されすぎて、「一見無縁」と思われる講義を聴講することができなかつた。この対策として、旧来の仕来りを破り、理科、工科と文科の「相互乗り入れ」を図って、工科大学で理科系、文科系（の学科）を設置するようになってきた。学生により広い視野と知識を持たせ、より学際的な訓練をするため、「単位制」「双学位制」などがしだいに採用されて来ている。

大学の研究は近年極めて活性化されてきている。中国は発展途上にあり、科学研究を経済建設に向けなければならないことは基本政策である。この背景から大学の研究は基礎研究より応用研究が多く行われている。政府機関に研究費を申請する場合には、研究の実用性、経済効果と利益が重要な項目となる。「タテ割り」の仕組は部門間に閉鎖状態を生じせしめている。その弊害を解決するため、近年、「横向聯合」（横断連合）の研究体制が推進され、大学と産業界の研究提携は一層緊密化されている。

一方、(両国の)異なる社会情勢と教育制度の下に学生の姿がどう異なってくるかという点に関心を抱く方が多い。一昨年の6月、私共の大学から系主任一行が名古屋大学を訪れ、名大祭へ案内された。その光景を見て諸先生方は驚いてぼんやりするほどであつた。「さすが日本の大学は違う」と絶えず驚嘆したと言つても過言ではない。日本と比べて、中国の勉強一方に片寄る大学生活は単調かつ地味である。毎年9月1日から新学期が始まり、山ほどの宿題とレポートおよび続々とやつて来る試験に追いまわされ、気のぬけない状態が続く。私の大学時代を思い出すと、5年間（当時重点大学は5年であつた）「寝室-食堂-教室」の「三点連線」という生活を繰り返していた。大きな建物の中にいると、季節の変化が感じられないほどであつた。メーデーの休みに、綿入れの防寒服を着たまふ沈陽の繁華街にある本屋へ出掛けた際やつと春を感じたしだいである。中国の大学（特に重

点大学）は入試の狭き門であることはよく知られている。確かに「受験戦争」という言葉は中国語にないが小学校から大学までの重点校制により、受験勉強は子供の時代から始まる。大学の関門に入つても入試の重圧から解放されず、のびのびすることがなかなかできない。10年間の文革動乱を経て安定団結の情勢となつた今日若者がこれほどまでにむさぼるように勉学する訳は納得しやすい。一方、身近な競争にも起因すると推察される。配分制度を持つ中国では就職のために心を痛める必要はない。しかし、重点大学、研究所などの理想的な就職先に入るには成績が重要となる。さらに文革の低迷から一転して学歴が重視される今日、大学院への志望者は多い。大学院の定員は限られているため進学はそれほど容易ではない。さらに、魅力的な道は先進国への留学である。その結果、競争は一層激しくなる。この二つの進学にはよい成績を取らなければ推薦もされないし、さらに国家統一試験をも通らなければ実現できない。とにかくよい成績を上げるには管理の厳しい集団生活の中で勉学せねばならず、夜になつて麻雀、ステレオなどに娯楽を求めることはまずできない。

一方、中国の学生の方が恵まれることも多い。学費、全寮制生活のための家賃、電気代、水道料から医療費まですべて無料で、勉強に専念でき、アルバイトなど考える必要はない。かえつて、ほとんどの学生は国から「助学金」（金額は家庭経済状況によつて）をもらうことができる。最近では、向学心を刺激するため、「奨学金」（金額は成績によつて）へ移行しつつある。だが、その金はいずれも文字どおり、勉学を助け奨励するもので返済不要である。ところが、当世の中国大学生にとってはこれだけでは不足となる。文革後の改革と開放時代に育てられた彼らは、建国初期の大学生とも文革前後の大学生とも精神構造が異なつてきている。相異点を列挙すれば、まず自由に考え行動する傾向が強く見られることである。学問にも思想にも、大学の「象牙の塔」から出て世界に目をむけ、自分の能力、とりわけ創造力の形成に役立てようとして、社会活動への関心が高く、能動的である。従来、理工科重視・文科軽視という傾向はそれほど変わっていないにもかかわらず、近年物理、数学のブームは山を越え、いま脚光を浴びているのは新設の「学際」学科のほか、経済（経営を含む）、法律、新聞などの学科も人気を集める。自由時間の使い方も多彩になつた。本文を書きながらあれこれと思ひ浮べられるのは次のようなことである。青は藍よりいれて藍より青し、中国の明るい将来は現在の若者に期待できる。でも、大学の入試の難関さえ通れば、人生の道が開けて来ると考える風潮は「十月病」（日本では「五月病」と聞いたが）を生み出す結果とならないのか、国と先生に保護されすぎて「くれない族」を生み出さないのか、そして、学歴が重視されるとともに「学歴主義」が登場しないのか、と大

学の教師として身にしみて感じざるを得ない。

帰国してから4か月が経つたが、全面改革の激流に巻き込まれる祖国ではすみずみに到るまで深刻な変化が出ていることに痛感している。「浦島太郎」の私にとって、あらゆる面で再認識して日進月歩のテンポに追いついていかなければならない。そのためには、体系的かつ適切な論議が不可欠なことはいうまでもない。本文の内容は

決して洗練されたものではなく、あくまでも限られた経験から拾った私見にすぎない。ただ、本稿を通じて日中大学の相異の一端を伝え、これから一層広がっていく両国間の文化交流にわずかでも役立てば幸いと思い、長年お世話になった日本の諸先生と友人に捧げるしだいである。

コ ラ ム

会社は今美容整形中

軽薄短小と騒がれ一種の流行とたかをくくっていた。しかしムードが現実的な問題に発展し、重厚長大で稼いだことが諸悪の元であるかのようにいわれると、いささか愚痴もこぼしたくなる。

今社も大衆も栄えつつある時代に仕事をした私は、質実剛健にして堅牢強固な鉄鋼マンこそが、発展する国を支える骨格として、女々しい産業をも大目に見れる自負心があつた。物は大きく力強く、エネルギーであれば些細なことは気に止めぬ感覚で、油の染みや汗の臭いも男の誇りであつた。

この活力ある源流の支えで川下文化が開花していったことには、その恩恵を受けている個人として何の恨みもない。もちつもたれつであればこれまでの自負心の低下は軽薄短小産業の恩恵で相補うことができる。もちろん水源さえ切れなければ、混沌とした川下文化に多くの人間臭と多様な価値感を見出すことができ楽しい。

しかし問題は川上を成す基幹工業は、きたるべきこの国の産業としてふさわしくないとする風潮である。一時の流行を越えて、会社も国も本気になつてしまった。構造的に川上に生息するように遺伝子の授受を行つてきた鉄鋼マンは、果たして川下で生きる新感覚に切替えできるだろうか。一部の研究者や管理者だけで

なく、鉄の臭いの染みた現場マンを含めてである。いずれにしろ執刀は始まつたのである。

NHKの文化ジャーナルで多摩美術大学の西尾先生が、軽薄短小はもはや古くこれからは遊楽美感だという。その理由は単位で計れるか否かにあり、虚業こそナウイといった感じだ。せつかく川下に目を向けたばかりなのに更に虹の掛橋を登れと変革を迫る。

鉄鋼にとって比較的親縁のチタンにこの一面を教えてくれる記述がある。形状記憶合金を利用した美学で学術誌のド真中に、触れたいような美女が上ぞつている(チタニウム、ジルコニウム, 34 (1986) p. 45)。古来からの豊胸美の中でチタンが果たした人気の秘密を解説しているが、川下の軽やかな感覚が染みしてくる。商品名も“ソフィブラこちE”，見る者も付ける子にも遊楽美感の刺激を与える。

今会社はこれら新分野開拓に懸命でバイオをやつているところも多い。私のような環境不順応な者は遺伝子組替実験のモルモットにしか役立ちそうにない。増子先生は本誌(73 (1987) p. 398)で非鉄側から見た鉄は、いまだに不思議な金属だという。チタンほどの感覚でないにしろ、新感覚で鉄に取り組む人々が見そこなわれる風潮はこわい。美人になることは誰かが不美人でなければならない。

(鋼管計測(株)化学技術部 瀬野 英夫)